

文芸大台

大台俳句グループ

路なりに 風花翔けり 漁師町 追
 教え唄 ひとめふためや 羽子日和 絢子
 羽子板と こっぼり下駄や 遙かな日 宏子
 くるくると 脇こそばゆき 柚子湯かな 路傍子
 羽子日和 少女身軽な スニーカー つね
 羽子板市 世相ながむる 写楽かな 由美子
 日に酔ふて 干柿は皺 増やしけり 二三江
 もら古りし 妻の羽子板 飾りけり 寛郎

紫明俳句会

抽斗の 一つ一つの 年用意 ナツエ
 雪時雨 ことごと煮える 鍋のもの ヨミ
 新築の 屋根に一羽の 初鴉 雪美
 袖子風呂に たった一人を 惜しみ入る 政枝
 湯豆腐や ぐらつと揺れて 食ぶ初むる わのえ
 一杯の 年酒に 心酔わせけり 次代
 三日早や 白紙のまゝの 日記帖 貞子
 枯急ぐ 中にしぶとさ 秘めながら 仁志夫
 年籠の 氏子の二、三 酔ってとり 金吾

日進俳句グループ

風風いで 町静かなり 冬の月 梢
 犬散歩 途中の夜明け 冬の朝 飛鳥
 なつかしさ 手に伝ひくる 賀状かな 鈴菜
 初春と いえども風は まだ重し 初瀬
 今発つと 思ひは故郷え 初電話 静
 又同じ 話といわれ 冬至の湯 桃花
 枯菊の もえゆく煙 香と残し 春日

龍頭句会

新調の 蓆にはじく 朴落葉 瞳
 長梯子 仕舞忘れて 初時雨 もと子
 落葉降る 烏と柿の 木に残し にしと
 そのかみの 武家屋敷あと 萩の花 千代
 山茶花の 唇赤き 蕾かな 則也
 父と子の 手が譲り合う 衣被 聖川

